様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2012～2013
課題番号：２４８２０００１

研究課題名（和文）韻律と説話構成に基づくアパブランシャ語の歴史的展開の研究

研究課題名（英文）A historical classification of Apabhramsa texts based on meters and narrative styles

研究代表者
山畑　倫志（YAMAHATA, TOMOYUKI）

北海道大学・文学研究科・専門研究員

研究者番号：００５２８２３４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,700,000円、（間接経費）　510,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では言語的変異の大きいアパブランシャ語（以下Ap）文献を整理し、規範化以前の初期段階、文語としての完成期、近代インド語への移行期に分類することを目的とする。研究成果は「韻律の変遷とAp．文献の関係」「Ap文学と古グジャラート語文学のラーサー文学との関係」の2点に分けられる。前者においてはAp文学の時代的な推移と当時の韻律理論書に見られる韻律の発展とを比較し，Apテキストの新古を推定した。後者においてはラーサー文学の初期の説話構成がApジャイナ教文学と非常に似ていることを指摘し，内容面で「近代インド語への移行期」のAp文献を切り分けうることを示した。

研究成果の概要（英文）：The Apabhramsa language is known to have numerous variations in the linguistic characteristics. This research attempted to classify these characteristics into three historical stages.
The research obtained the two important results mentioned below. First, a comparison method of meter proved to be applicable to Apabhramsa literature. We selected the meters of some Apabhramsa verses of which the dates are already known. Comparing the meters with the descriptions of prosodists at that time, it is confirmed that the early Apabhramsa verses can be classified according to some meters.
The second result shows a close relation of the Rasa literature with the Jain hagiographical literature written in Apabhramsa. The Rasa generally consists of fictitious stories focused on real kings and so on. The texts are written in New Indic languages and contemporary with late Apabhramsa texts. The early texts of the Rasa and the Jain hagiographies resemble in a structure of story.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：印度哲学・仏教学

キーワード：インド語学　インド文学　ジャイナ教文学　アパブランシャ語　グジャラート語　韻律学　国際情報交換　インド

１．研究開始当初の背景

インド語の歴史の中でもヴェーダ語やサンスクリット語を含む古期インド語とヒンディー語などを含む近代インド語は個々の語彙や言語外の情報から直接的に関係することは明らかである。だがその両者を繋ぐ位置にある中期インド語の実態については多数の資料が残されているにも関わらず，それぞれの関係が混沌としており，未だ大まかな枠組みが築かれているのみである。その中期インド語の最新層に当たるのが本研究の代表者が専門とするアパブランシャ語である。使用時期は紀元六世紀から十五世紀，使用地域は北インド全域であり，一つの言語名で示されるが諸文献間あるいは一文献の内部においても言語上の差異が 多く含まれている。そのため今までそれらの差異が北インド諸地域の近代諸語と関係するのではないかという着想のもと，タガレー(1948)をはじめ、いくつかの研究がなされてきた。

本研究の代表者はこれまで各地域のアパブランシャ語文献を言語的な面に限らず，その使用環境にまで視野を広げてアパブランシャ語と呼ばれる言語の実態の解明に努めてきた。そのなかでアパブランシャ語は各地域の言語の直系の先祖にあたるものではなく，あくまでインド西部の言語を母体として，中世の一時期に流行した文語の一種であるとの結論に達した。それは現存する文献の地域的な偏り，社会的な扱い，さらに言語特徴の差異と近代インド諸語の特徴を比較勘案した結果である。そのためアパブランシャ語を西インドの一言語と考えた上で，その言語特徴の差異を新たな枠組みで整理しなおす作業が必要となった。

またアパブランシャ語文献の大多数はジャイナ教徒による説話文学であり，その中にはインド古典の正統な伝統であるサンスクリット文学から漏れた要素が多く含まれている。そのためインドの説話伝承と近代インド文学の成立の経緯を解明するためにもアパブランシャ語文献の研究は重要である。

２．研究の目的

アパブランシャ語文献の中に見られる雑多で変異の大きい諸特徴を整理し，規範化以前の初期段階，文語としての完成期，近代インド語への移行期に分類することを目的とする。アパブランシャ語は多くの差異を含む言語であるが，研究代表者のこれまでの研究により，それが地域の方言的な差に起因する蓋 然 性 は 低いことがわかってきた。そこで実際に存在する差異を説明するために，韻律や擬古表現，説話の形式など言語的特徴以外の要素から改めて整理し，インドの言語・文学史の中でも未解明であるアパブランシャ語の流行から近代インド諸語に至る展開を明らかにし，言語・文学史上のミッシングリンクを埋めることを試みる。

３．研究の方法

研究目的を達成するための具体的な方法は大きく分類して次の四段階から構成される。

(1)韻律の歴史的展開の把握
(2)文法家たちの記述の整理
(3)説話形式の変遷の整理
(4) 古 ラージャスターン語や古グジャラート文献との比較

全体像としてはアパブランシャ語文学の歴史を 12 世紀のジャイナ教徒の学者ヘーマチャンドラ以前と以後で二分する。ヘーマチャンドラ以前は素朴な言語形態であったアパブランシャ語が文語として整えられ規範化していく過程を明らかにし，後者では完成された文章語となったアパブランシャ語の様々な要素が後代の文学作品に引き継がれ，文語としての地位も譲っていく過程を見いだしていく。

４．研究成果

本研究ではアパブランシャ語文献の中に見られる雑多で変異の大きい諸特徴を整理し，規範化以前の初期段階，文語としての完成期，近代インド語への移行期に分類することを目的とする。研究成果は下記の 7 つに分類できる。

(1)「初期アパブランシャ語の推定について」インドの古典文献に用いられる韻律は時代によって変化するため作成時期の推定に利用で きる。アパブランシャ語の時代には従来の音節数に基づく韻律からモーラ数を基礎にした韻律への移行が大きく進み，脚韻の多用などの新しい特徴も出現する。このような韻律の変化を材料として初期アパブランシャ語抽出の可能性を検討した。
アパブランシャ語文学における韻律使用の展開の特徴は，サンスクリット語や各種プラークリット語で既に発展していた，または同時期に発展しつつあった様々な古典的な韻律の影響を大きく受けながらも，古典的な伝統とは異なる歌謡の伝統から取り入れた韻律形式の使用にある。使用される韻律にも流行が存在するため，それに基づいて分析を行えば年代が不明である各種アパブランシャ語文献の詩節も相対的な年代推定が可能であることを示した。日本南アジア学会第 25 回全国大会にて発表。

(2)「ラーサー文学の由来について」初期のラーサー文学はジャイナ教徒が主体とな

って作成されており，その内容も後の英雄伝記よりもジャイナ教のアパブランシャ語説話により近いことがわかる。従来は歌謡として用いられたラーソーが文学作品になる過程で，ジャイナ教徒がその形式を採用したことは重要なことと考えられる。ちなみに論文タイトルなどにおいて「ラーサー」を「ラーソー」としているものがあるが，言語や作品によって揺れがあり，当初は「ラーソー」をジャンル名として採用していたことによる。現在はすべて「ラーサー」に統一している。『印度哲学仏教学』第 61 巻第 1 号に論文掲載。

(3)「10-12 世紀グジャラートにおけるジャイナ教聖者伝の展開」10 世紀から 12 世紀にかけてアパブランシャ語によるジャイナ教行伝説話は主題の多様化，形式の精緻化の傾向が強まり盛んに作品が作られる。その内容は「６３偉人」として整理されたジャイナ教神話上の登場人物の伝記を枠として教義を説いていくものであった。これらは大部の作品が主であり，形式も１０から２０詩節からなり，韻律が統一されるカダヴァカ，カダヴァカを複数含み内容面での大きな区切りとなるサンディという部分から構成され，「サンディ・バンダ」と名付けられた。

それに対してグジャラート最古の文学である「ラーサー」も 12 世紀頃から同じ地域で出現する。ラーサーは「ラーサー・バンダ」とも呼ばれ，しばしば詩論書などにおいて「ラーサー・バンダ」と対置される。典型的なラーサー文学は『プリトヴィーラージ・ラーソー』のように実在の人物を題材とした英雄物語が多く，ジャイナ教のテーマを扱うとは限らない。だが，最初期のラーサー文学はジャイナ教徒による作品であり，内容も 63 偉人の一人であるバラタを主要な登場人物としている。

12 世紀以降ラーサー形式の作品はアパブランシャ語のみならず、古グジャラート語、古ヒンディー語などの近代インド語でも著されるようになり，また内容もジャイナ教説話にとどまらず実在のヒンドゥーの王を題材とするようになる。ラーサー・バンダはサンディ・バンダに比べより短く歌謡に近い形式であり，舞踊とともに歌われるのに適していたと考えられている。

同時期にガッチャと呼ばれるジャイナ教の共同体が登場しつつあったことも考慮に入れると，サンディからラーサーへと主たる文学形式が変化した背景にはその説話を通じて訴えかける相手が変化していたことがが推測される。今後ジャイナ教団の展開史も視野に入れながら検討していく必要がある。2012 年度バクティ研究会にて発表。

(4)「現地における写本調査」平成 24 年 12 月 23 日から平成 25 年 1 月 4 日にかけてインドにおいて写本調査を行った。以前より訪問していたインディラ・ガンディー国立芸術センターやラージャスターン東方研究所に加えてアーメダーバードの LD 研究所やグジャラート文学アカデミーといった古グジャラート語文献所蔵の研究所の協力も仰ぐことができた。

収集した資料は主にラーサー文学のものであり，特に最初期に当たるジャイナ教徒によるラーサーについて各種資料を入手することができた。これにより初期ラーサー文学の動向の分析を多面的に検討することが可能となった。

(5)「韻律によるアパブランシャ語文献の時代推定」本テーマの目的は言語的に多様な要素を含むアパブランシャ語文献の年代を推定し分類する基準の一つとして韻律を用いることにある。古代インド語では様々な韻律が用いられてきたが，時代によって変遷が見られる。そのため韻律は年代推定が困難な文献の相対的な年代を推定するにあたって有用な場合がままある。当時の時代背景としては古典サンスクリット語による詩作・韻律技法が発展していた一方，またそれとは異なったタイプのモーラ数を基礎にした韻律が中期インド語を中心として定着しだしていた。本テーマではアパブランシャ語の最古の韻律を「マートラー律」と「ドーハー律」としたうえで，各種韻律の発展過程を仮定し，それにより文献間および文献内部におけるテキストの新古を推定する。対象とする作品は９世紀のスヴァヤンブーの作品を中心とする。『印度学仏教学研究』第 62 巻第 2 号に論文掲載。

(6)「ラーサー・バンダの形成」このテーマではインドにおける近代語文学の嚆矢であるラーサー形式の文学について，その初期段階ではジャイナ教説話文学の影響が非常に強いこと，またそのことが後代の非ジャイナ教のラーサーの偉人伝的性格の強さにつながることを論じた。

特に最初期のラーサーである「バラテーシュヴァラ・バーフバリ・ラーサ」を詳細にとりあげた。同作品は６３偉人の一人バラタとその弟バーフバリンが王位を巡って争い，その結果争いの空しさを理解したバーフバリンが出家,次いでバラタも出家するストーリーである。この説話の特徴は兄弟二人の争う様を種々描写しているところにある。

ラーサー文学というジャンルは後代において実在の王などの人物の戦記が中心を占めていく。最初期のラーサーである本作も数あるジャイナ教偉人伝のなかからこの兄弟争いを選んでいるが，それは後代盛んになるラーサー文学の特徴と適合する。当時すでに存在していたが文語の世界には現れていなかったラーサー形式をジャイナ教徒が活用した結果，文学ジャンルの一つとして定着していった経緯が推測される日本南アジア学

会第 26 回全国大会において発表。

(7)「ラーサー形式の変遷」ラーサー修辞学や韻律学の論書におけるラーサー文学の形式についての記述の変化を追い，主に使用される韻律によってラーサーが規定されてきたことを明らかにした。『奥田聖應先生頌寿記念インド学仏教学論集』に掲載。

５．主な発表論文等
（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２件）

① 山畑 倫志，韻律の変化を用いたアパブランシャ語文献の年代区分，印度学仏教学研究，査読有，62 巻 2 号，2014，251-256

② 山畑 倫志，初期ラーソー文学の展開について，印度学仏教学研究，査読有，61 巻 1 号，2012，290-295

〔学会発表〕（計　４件）

① 山畑 倫志，ラーサー・バンダの形成について，日本南アジア学会第 26 回全国大会，2013 年 10 月 5 日，広島大学（東広島市）

② 山畑 倫志，韻律の変化を用いたアパブランシャ語文献の年代区分，日本印度学仏教学会第 64 回学術大会，2013 年 8 月 31 日，島根県民会館（松江市）

③ 山畑 倫志，10-12 世紀グジャラートにおけるジャイナ教聖者伝の展開，2012 年度バクティ研究会，2013 年 3 月 16 日，拓殖大学（東京都）

④ 山畑 倫志，初期アパブランシャ語の推定について，日本南アジア学会第 25 回全国大会，2012 年 10 月 6 日，東京外国語大学（府中市）

〔図書〕（計　１件）

① 奥田聖應先生頌寿記念論集刊行会，佼成出版社，奥田聖應先生頌寿記念インド学仏教学論集，2014，460-468

６．研究組織
(1)研究代表者
山畑　倫志　　（YAMAHATA，Tomoyuki）
北海道大学・大学院文学研究科・専門研究員
研究者番号：００５２８２３４